

越巻村(現新川町)伝承の 念佛講について

高橋 清

一、はじめに

越巻村(現新川町)は綾瀬川左岸に位置し低湿地帯を開拓されて出来た水田単作地帯である。水害常習地帯であり最近の事象をみれば、昭和五十七年九月十二日、昭和六十一年八月五日の二回の水害は昔の姿が再現された。

その様な農村集落に江戸時代であれ、それ以前の時代であれ佛教の布教と共にその本質を農民に知らしむるということは仲々至難であったに相違ない。

学問のない者に哲学を教えることであるからである。それ故にてっとり速く教示する方法と言へば簡単なりズムに合せて歌う念佛歌・念佛おどりであったろうと思われる。

庶民をして「なるほど」という気持ちをおこさせることとの手段であったに相違ない。

越谷市内旧集落の農村地帯にはいづれの地区でも伝承されている。新川町に於ても一丁目(旧丸の内部落)、二丁目(旧中新田部落)と別々に老婦人達による念佛講がある。

念佛はおそらく現在の街の中心部の方からひろまったものと思われる。街は旅人もあるし僧の行き来もあるし、寺も早くから出来たであつたらうと思われるからである。

然し長い年月を経るに従って街の中では念佛講の存在は風前の灯と聞く。私の住んでいる所も市街地となったときには念佛の伝承も消滅のうきめに会うかも知れないと思う。

新興住宅地(自治会)に念佛講があらたに発生したとゆう話はきかない。

伝統ある農村集落の念佛、と言ってもどの位の年月の伝統であるかはつきりしたことはわからない。しかしこの念佛の意味を理解し過去の時代に憶いを致すことは郷土を知る一つの「てだて」であると思う。

二、文献からの念佛

塚本善隆氏は次の様に書いている。

念佛(世界大百科事典平凡社発行所収)

サンスクリットの訳 佛を心にもっぱら思念すること、で原始佛教では佛教徒の実践行として三念(念仏・念法・念僧)あるいは六念(三念に念戒・念施・念天を加える)の第一にあげられている。仏に思いをこらすことから転じて仏の全身やその各部の特徴(いわゆる相好)を明確に観察思念すること(観念の念仏)にもなり、とにかく大乘仏教の種々の浄土教が発達するといよいよ重要視せられ、口に仏名を唱えることを念仏といい、一般信者にも容易にひろく行われる実践行となった。ことに〈無量寿経〉〈観無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈浄土三部経〉などによる浄土教では念仏の行が強調され、中国日本でこの三部経を中心に阿弥陀浄土教が興隆し普及すること、念仏とは阿弥陀仏を思念すること、観察すること、さらに最も普通には口に〈南

無阿弥陀仏(六字名号)を唱えること(口称念仏)を意味するようになった。

中国浄土教の始祖とされる東晋の廬山(ろざん)の慧遠(えおん)が結成した同志(白蓮社)によって行われた念仏教は心に仏を観察し思念する方向にあったが北魏末の曇鸞(どんらん)から唐初の道綽(どうしゃく)善導によって発展した浄土教ではいわゆる(易行)の称名念仏が凡夫・悪人の救済行として強調され称名がひろく大衆の間に行われるにいたった。日本の法然やその門流の浄土教は後の三師の浄土教義を継承して日本の新展開をとげたものである。法然・親鸞・一遍などによって民衆の間にひろく普及した念仏は庶民社会の踊念仏・六斎念仏・引声(いんじょう)念仏・大念仏・念仏狂言などの郷土芸能を生むにいたった。又念仏踊(踊念仏)について荻原竜夫氏は次の様に述べている。

念仏踊(踊念仏)(世界大百科事典所収)
或は踊躍(ゆやく)念仏ともいう。

念仏にあわせて金鼓その他の楽器をならしつつ多輪になって踊るも平安時代・空也が市井や道場にあつてこれを民衆にすすめたと伝え鎌倉時代に一遍上人がこれをとりあげて教義上の根拠づけをした。(大無量寿経)に(踊躍大観喜)とあるのにもとづくなどといわれるがもとより日本古代から村々で行われた民俗舞踊が多少の仏教的粉飾をうけたものと見るべきで後世徐々に下層民の芸能專業化に伴なって広くもてはやされるに至った。

十三〜十四世紀にいちじるしく流行したので、それ

が仏教の権威をおとすものだとして非議する人も多かった。

中世以降京都ではこれが鎮花祭と合体した融通念仏の一形式として発展し、組織だった民俗芸能とさえなった。

廬山正法寺や御影堂の踊念仏・千本釈迦堂・嵯峨清涼寺の念仏・壬生(みぶ)の大念仏などがそれでまた近世には六斎念仏・泡斎念仏の類が広く各地に派生し発展した。

念仏講については石田瑞磨氏が次のように記述している。(世界大百科事典所収)

講の語は経論の講読を意味し仁王講・法華八講などその類があるが念仏講は念仏に同心のものが集って結社をつくり、念仏ともに行うに至ったものをいう。

古くは中国の廬山の(白蓮社)をはじめ念仏結社をつくられた例は多いが日本では平安中期以後往生講・迎(むかえ)講などが広くさかに行われ民衆の間に浸透した。

念仏講としては種々のものが起っており浄土宗の別時念仏や真宗の報恩講などもこの種のものと思なされる。

しかしこうしたもののほかにある指導者の下に同心相集って説教を聞き念仏をはげむかたわら娛樂慰安・懇親・をかねた習俗的なものにも変ったものもある。

三、新川町の念仏・念仏講

現存せる新川町の念仏では「口に仏名を唱えること」は続いている。(二、文献からの念仏)

お題目 十三仏 三回となえる
おふどう おしやか おもんじゆ
おふげん おぢぞう おみろく
おやくし おかんのん おせいし
おあみだ おわしく おだいにち

こくぞうさま南無阿弥陀仏 々々

念仏踊(踊念仏)は現存してはいない。

然し三郡送り大師講(西新井大師を本拠として新四
国八十八ヶ所を三郡へ東京南足立郡埼玉県北足立郡・
南埼玉郡)の寺社に設定し回遊しながら弘法大師の尊
像を送った行事)盛んな昭和三十年頃まではあった。

単調な調子をつけて歌う「念仏歌」これを金鼓その
他の楽器をならして歌う人を「念仏申し」と称した。
主として男の老人達だ。踊る婦人達を「踊りっ子」と
称した。この婦人達も五、六十の初老の婦人達であっ
た。

新川町では昭和初期の頃であっても「念仏申し」や
「念仏踊りっ子」は居らなかった。

今新川町に現存するのは念仏講である。

「同心相集って念仏にはげむかたわら娯楽・慰安・
懇親・をかねた習俗的な行事」と石田氏は述べている
がまきにその通りである。新川町に於て行われている
念仏歌には毎月の「月並念仏」法事の際の「おと
き念仏」彼岸には「彼岸念仏」お盆には「棚念仏」四
月十日には「ひよう念仏」小寒に入つて三日目にやる
「寒念仏」家を新築すると「火ぶせの念仏」これは「家
見念仏」とも称する。葬式には「忌中念仏」子供の葬
式には「さいの河原」この外にも「岩舟」「高野山」

「法事これさま」「念仏行者」「福の神」など作者不詳・
調子は口伝による伝承で講に入っている人でなければ
唄えない。

以上の念仏歌詩を順に紹介してみることにする。

四、念仏歌詩の紹介

四方がため(毎月の月並念仏)

一、帰命頂来 浄土なり

東は葉師の浄土なり

南は観音 浄土なり

西は西方で弥陀如来

北はお釈迦の浄土なり

中は大日 不動様

もくれん尊者の仰せには

それを念じるともがらは

おせいに 疑ひ 更になし

南無阿弥陀仏 々々

豊穰極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土え参るべし

二、さても美事な おまいかな

香爐に油を立てならべ

極楽浄土は之にあり

南無阿弥陀仏 々々

豊穰極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土え参るべし

三、弥陀様 おまいのたて花は

夜まし 日ましにしほれます

吾等が ごしょう もあの如く

南無阿弥陀仏 々々

豊穰極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土へ参るべし

四、極楽浄土の 一の門

錢でも金でも 開かぬ門

念仏ろくじで 押し開く

南無阿弥陀仏 々々

豊穰極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土へ参るべし

五、帰命頂来 六阿弥陀

としまびようぶという人は

一人持ちたる子を殺し

思いなげくは限りなし

熊野え参詣をいたすべし

熊野えきもくをきりながし

びようぶ が裏えとつきとまる

びようぶ が裏では とりあげて

仏を六体 きざみあげ

吾が子に似たのは ひとりなし

南無阿弥陀仏 々々

ひきずり(月並念仏)

一、やーれ 親の 御墓の八重櫻

なぜにひよどり 巢をかけた

やーれ早く立ち寄れ花が散る

それほど大事な花なれば

天吹く風も いうべし

弥陀様 浄土え参るべし

二、やーれ之より東の木ののもとに

小池に黄金が みだれ咲く

やーれ黄金つるべに 黄金ざお

ところ繁昌と汲み上げる

南無阿弥陀仏 々々

弥陀様 浄土へ参るべし

おとき念仏(法事念仏)

一、思ひも及ばず 之に来て

そんじも及ばず お茶たべて

きせいのおおりか こがの茶か

旅のつかれで 飲みしれぬ

宿え帰りて 物語り

所もよかれ 村よかれ

ましてお宿は なおよかれ

南無阿弥陀仏 々々

豊穰極楽 南無阿弥陀

回向のお念仏 南無阿弥陀

月並念仏は毎月一回同心相集って念仏をはげむことである。発声も忘れてはならないし念仏そのものを忘れてはならないので行う。法事とは故人の年回忌である。

法事は近親者が集って僧のお経と説教をいただき墓参りをする。集った人達は故人を偲び歓談する。仏の事は昔より催促なしと言いい心には懸けていても仲々出来ないものである。新川町の墓には古い石塔は少い。元禄年間の石は古い方である。元禄年間とは庶民の富が蓄積された時代である。それまでは武士階級

しか建てられなかった墓が漸く一般庶民・農民の間にも建立出来る時代となった事を物語っているのではないだろうか。

「豊穰極楽」と「南無阿弥陀」の語が多く歌詩の中に出て来ることに注目したい。

このことについては後程私見を述べてみたいと思う。次に「からくり」という念仏がある。之も毎月/month 月並念仏に入っているようだ。

からくり

一、御念仏 からくる から糸は

三尺三寸の むしつなで

むしずの糸でな からくりて

こがねの文句で 汲みあげて

弥陀様 おまいに 差し上げて

おいとま申して いざ帰る

南無阿弥陀仏 々々

二、どこやいづくの 馬のかわ

太鼓にはられて ごせうかぶ

太鼓の御念仏 南無阿弥陀

三界浄仏 南無阿弥陀

次は彼岸念仏。寺念仏とも謂う。

彼岸念仏

一、帰命頂来 有難や

弥陀の光か 寺がらか

さては浄土の ちえがらか

南無阿弥陀仏 々々

二、帰命頂来 この寺の

香の煙りは 細けれど
天に上りて 雲となる

雲は何雲 五色雲

五色の雲の御来光

おがませ給えよ 吾が親に

南無阿弥陀仏 々々

春秋の彼岸の時期は一番氣候の良いときである。春は寒い冬も過ぎ草木の芽は一斉に吹きはじめみどりとなつて来る。大麦小麦(今は余り見かけないが)の葉も一段と萌えで春をうたいあげているようだ。かげろうは立ちいよく農作業は忙しくなる前のホットする時期が春の彼岸である。

秋は又暑い夏も過ぎ吹べ風も涼しくなり稲の穂も出揃い稔実期である。丁度稲刈前である。寺をつつんだ森の静寂と墓参りの人々の群れ、極楽浄土とはこの様な景色ではないかと歌っている。墓参りの線香の煙りは寺や墓地をつつんで五色雲の様だ。それに太陽光線が映えて御来光の様だと歌っている。

次に家見念仏(火ぶせの念仏)を誌す。

火防せの念仏

一、帰命頂来こんにちわ

これのやかたえ まねかれて

おにわさきを ながむれば

あら あら 起して 地ぎようする

あきの方から土よせて

土方や手人や たのみ人

仕事師 木やりで地ぎょうする

大工は絵図しく 土台しく

東のじょうやは よねがたつ

南のじょうやは ぜにがたつ

西のじょうやは かねがたつ

北のじょうやは 悪魔よけ

お祝い ことぶき おめでたい

二、 帰命頂来 こんにちわ

これのやかたえ 招ねかれて

いづくの大工が 建てたやら

四方白壁 霜柱

氷の梁で 雪のけた

雨のたる木で つゆの草

板えんまでも 水はりで

火ぶせの念仏 おめでたい

三、 帰命頂来 こんにちわ

これのやかたえ 招ねかれて

勝手元を 見申せば

十二のかまどを ねりあげて

東切りまど ぜにすだれ

白きねずみが 導きて

よねを くわえて お倉ゆき

お祝ことぶき お目出度い

四、 帰命頂来 こんにちわ

これの館え 招ねかれて

一家親類 呼び集め

かねや太鼓を そーろいて

家見念仏を申します

お祝い ことぶき お目出度い

五、 帰命頂来 こんにちわ

これの館へ 招ねかれて

伊勢に 榛名に 秋葉山

火防せの箱を したためて

これがお宿の おみやげに

お祝い ことぶきお目出度い

家を新築すると主人は念仏講にお願いして火防せの念仏をやっていた。新らしい家を見せていただく（家見）と共に火防せ念仏を、申しあげ「火災の難」から守るとの意味だ。歌詩の意は誰にも理解出来よう。

伊勢の大神宮様も榛名山神社も秋葉山もみんな火防の神様でありおふだがいただける。

個人なり代参なり神参りして帰ってくると火防のおふだとおみやげを隣り近所や親せきに配ったものである。以上のような風習も昭和三十年頃まではあったが今はやらない。

次に「ひょう念仏」を紹介する。

「ひょう」は雹である。夏のはじめより天候の急変により多くは雷雨と共に雹が降る。

雹が降ると作物が大きな害を被る。この難をのがれる為の念仏である。

毎年四月十日にやるので「十日念仏」とも言う。

雹念仏（十日念仏）

帰命頂来 榛名山

榛名のお池の 竜神は

いわれ いかにと たずぬれば

昔お江戸の 徳川の
三代公の 御代の時
五百五十の 旗本に
大越金兵衛の娘にて
一人娘の 姫君は
男子二人をもうけしに
数万の人の 為なりと
榛名のお池に身を沈め
二人の子供は 恋しさに
姫君姫君へと呼ばわれて
姫君姿を あらわして
吾の姿は 竜神ゆえ
二人の子供は驚きて
兄上様は 善光寺
弟君は 真言宗
親子三人もろともに
多くの人の為なりと
数万の人助けんと
電念仏をとないつつ
姫の えんにち 三月十日なり
おいわか 男女 集まりて
朝のムツより 夕六時
南無阿弥陀仏と唱へれば
電の難も のがるべし
この有難さ 世にひろめ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

東京のお盆は七月であるが田舎のお盆は八月であ

る。お盆の念仏に「かまのくち」と言うのがある。八月一日を「かまのくち」と言う。死者があゝの世に行つて初めて迎えるお盆、八月一日は子供達、近親者が集つて高灯笼を立てる。そして十三日には盆棚(精霊棚)をつくる。そして家族はちようちんを持ってお墓に死者の霊を迎えにゆく。この灯を精霊棚に移して拝む。お供物をする。八月十五日の午後こんどは死者の霊(灯)をお墓へ送られてゆく。これがお盆の行事である。

かまのくち

一、極楽浄土の門があく

高灯笼 立てなよ 高く立て

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

二、七月なかばの十三日

六尺巾に棚つりて

初物 初物 皆あげて

色よき花をば 差しあげて

三、仏は宿えと急ぎ足

宿では仏を待ち受ける

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

次に葬式のときの念仏、忌中念仏、とむらい念仏とも言う。「この忌中念仏は順があつて一つの儀式とも言える。その次第は次の通りである。(一)く九は順序の番号)

一、さんげして「三回唱へる」

我昔所造 諸悪業

皆由無始 貧瞋痴

従身語 意志所生

一切我今皆懺悔

七、忌中念仏

帰命頂来 十七が

二、しみょうほっしん (一回唱える)

まかびろう しゃなぷつ 南無大恩

きゅしゅ釈迦牟尼如来南無極樂世界

ほうがんしゅは 阿弥陀如来

南無びよぶかい 十方世界

しゅだいぼさつ しゅ天でんじ

(一部意味不明)

三、おんぼつけ(二十一回唱える)

おんあぶぎや べいろしやのう

なかぼたら まにはんどま

じんばら はらばりたや うん

四、十三仏御題目(三回唱える)前文参照

五、四方がため(一番から四番まで)

前文参照

六、岩舟

帰命頂来 岩舟の

岩舟地蔵の はすの池

ぐぜいの舟は うかれくる

もとは白かね ろはこがね

ろくじのみようごに帆をあげて

地蔵ぼさつはサオのやく

観音 勢至 はかねのやく

かねうつ しもくで かじをとる

西へ西へと おのりある

西はさい方 弥陀如来

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

かんの手先に 手をかけて

これからくるのが 親ごさま

にきの彼岸の 七月の

七月十三日の はすのはで

みづむけ たのむよ みそはぎで

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

帰命頂来 野辺のさき

あまたの人に おくられて

死出の山路で あと見れば

都の里は 遠くなる

極樂浄土は 近くなる

これから先は 一人旅

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

八、からくり(一番二番) 前文参照

九、ごぶつほうがん(一部意味不詳)

ごぶつほうがん りき

むう みよう ゆくおう

じよう かい じつとう

しこく しじよう 不退転

いんどうさんの じようほうかい

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

三回唱えて終りとなる。

それから忌中膳が出てごちそうになり子供一同や

親戚一同、当家より御苦労様と金一封と引出物が出る

のである。

子供の仏様には「さいの河原」と言う念仏がある。

さいの河原

さいの河原の お地藏様

さいの河原の 子供らは

ふたつや三つや 四つや五つ

十にも足らぬ 幼子が

小石を集めて 塔を組む

いちじう組んでは 父恋し

にじう組んでは しゃば恋し

そこへ 鬼めが立ちよりて

積んだる塔を 打ち破り

そこで子供は きゃあと泣く

そこえ お地藏様が立寄りて

しゃく杖や 衣にすがりつき

今日こそ おれを親と見よ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

高野山

歸命頂来 高野山 女禁令の山なれば

松はあれども 女松なし

竹はあれども 女竹なし

枝さえ とまる 鳥さいも

おすはあれども めすはなし

二人 はしやなぎ かがみやま

なかには ろくごの はしごある

念仏申さぬ その人は

糸より細いと 見てわたる

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

福の神

歸命頂来 皆様よ

福の神様 まねくには

天とう様より 早おきて

親に孝行 よろこばせ

神や仏を 敬いて

先祖のことを忘れずに

やしきをきれいに 掃除して

夫婦の仲も むつましく

親を大切 子を愛し

その日の家業を 怠らず

となり近所は 大切に

通す事は 親とおし

知らぬ事は 聞くがよし

知りたる事は 教えべし

先祖の功德は するがよい

借りたる物は 早かいせ

とかくあるもの かしてやる

けんか口論 せぬがよい

義理 恥ばかりは かかぬ様

常々心に かけたなら

七福神が 舞い来る

これがすなわち 福の神

お家ますます ごはんじよう

法事 これさま

一、これさまの お旦那様は

親の法事を いたします

石塔に戒名 うつされて

親とゆう字を おがむには

なないのひざを 八重におり

おがませ給よ 吾が親よ

二、これさまの お丹那樣は

親の法事を いたします

しんせき一同 よびよせて

念仏申しに 沙汰をして

まれなるとうばを 立てまして

立てたとうばに うぐいすが

止ってホケキヨを 呼んでいる

三、これさまの 力丹那樣は

親の年忌を いたします

石塔にお花を 立てかけて

嫁ごにとうばを かつがせて

孫子をつれて 墓参り

念仏行者

歸命頂来 ごしょ願ひ

春の弥生に ほととぎす

父の為とて 高野山

母の為とて 羽黒山

菩提の為とて 伊勢参宮

長の旅路の 疲れとて

一夜の宿に とりおくれ

長者の庭に 宿をとり

一夜をあかす そのときに

はるかむこうを 眺むれば

千本松原 植えそろい

中には泉水 その中に

め亀 お亀が 舞い遊び

三階松の 二の枝に

男女の鶴が 集りて

大きつ小さつで 巢をつくる

十二の玉子を 生みそろい

その鳥 立つとき 日を選む

諸仏 菩薩が集りて

金のさかずき 銀の台

長いの ちょうしで飲む酒は

泉の酒で 甘露なり

念仏行者の 人人は

諸仏 菩薩の 恵みにて

福祿無量で 日をおくる

念仏歌詩の紹介は以上で終りとする。

五、「豊穰極楽南無阿弥陀」に就ての私見

前文「四方がため」「おとき念仏」には「豊穰極楽南無阿弥陀」の語が多く出てくる。昔々この念仏がつくられた時代は「五穀豊穰(米麦、豆ひえ、あわなどが豊作であること)は極楽世界」ではなかったかと思われる。食物が腹一杯たべられて雨のもらない家に住めることは最も小さな極楽と理解される。又大衆の願

望であったと思われる。ならば地獄世界とは？それは飢餓である。最近の飢餓地獄はアフリカ、エチオピアなどの旱魃による姿ではなからうか。一日一食の食事さえ満足にとれない西アフリカの子供達。一人当たり二〇〇円あれば一ヶ月の学校給食がまかなえると新聞は報道している。然し日本の社会にもこれに似た飢餓地獄が大正時代、昭和八、九年頃とあったのである。次に大正二年々末の飢餓地獄を紹介する。

週刊ポスト 九二七号 「平和の失速」には次の様に記述されている。児島 襄 著所収

大正二年十二月のやまと新聞には北海道、東北地方の凶作が報道された。

北海道の農民は「櫛の実」「キャベツの根」「しいな」を食べ、東北地方では餓死者を記録した。欠食児童が増え「アワ」「ヒエ」などの弁当を持参する生徒はうらやましがられ、ジャガイモ一個、それすら昼食時に食べられぬ生徒が多くなった。

学課の授業には耐えられても体操の時間になると栄養不足のため卒倒する者が出て次第に休校者が増えだしたと新聞は伝えた。米も味噌も金があれば買えるが夏の水害と早い冬の訪れは作物を育てず収穫のない農家にとっては収入がなく、雪で出稼ぎ場もせばめられるので文字通り「草根木皮」で飢えをしのぐことになるのである。飢えは学校に通う児童だけでなく教員もおそった。町や村の住民が困窮して税金がはらえないので町立村立の学校の教員の給料も支給できなからである。

福島県では自分の家を「薪」として売って飢えと寒

さをしのぐとする農家があらわれた。あばら家にせよ独立家屋を炭より安い「十五、六円で売り納屋、馬小屋、急造の掘立小屋です」そうとする。

「昆布」のような衣類を身につけ「石」のようなフトンに横たわり、ムシロ一枚で吹雪をしのぐ有様は「方丈記」の世界だ。と探訪した新聞記者は嘆声した。上野駅には毎日買われた北国の娘たちをのせた列車が到着していた。女工、売春婦などに売られる娘たちで市内各所の遊郭に、「色白で口の重い新顔」がふえはじめた。

東京でも貧困者の生活はより一層の苦しさを加え、年の瀬をむかえて貧窮者の子供のかよう「特殊小学校」では栄養失調とわかる顔が急増した。校医は失神する児童をみると薬よりも「牛乳とパン」を与えるようになったという。

「世は不景気なり、少くとも不景気が襲来しつつあり新年は如何なる年ならんか、吾人は異変と騒動を感じるものなり」東京日日新聞はそんな予測をこころみだが東北の惨状も東京の貧窮者も当時は一般世相の一部とみなされがちであった。

以上が飢餓地獄の様相である。一般世相の一部となされがちであったと書かれているから、その時代或はそれ以前には度々この様なことがあったにちがいない。だからこそ人々は「風雨順時、五穀豊穰」を神仏に祈願したものであろう。(神社の鳥居、寺の鐘などに刻まれているのを見る)念仏に現われる「豊穰極楽、南無阿弥陀」とは五穀の豊穰を阿弥陀如来に祈願したものであると思う。

天候に恵まれ作物が豊かに稔り、食物に困らぬくらは庶民にとっては「極楽」であったと推察されるのである。

今の時代は毎日が飽食であるから昔の人から見れば、毎日が「極楽」であると思う。

又歴史上から見ても徳川時代後期の「天明の大飢饉」と「天保の大飢饉」が有名な大飢饉である。「読める年表」江戸篇曰執筆左方郁子より引用して見る。

卯歳の飢饉「天明の天災と飢饉」（一七八三年）天明の大飢饉おこる。天明二年は雨が多かった。諸国に洪水があり田地に被害が出ている。雨が多いと東北は冷害になる。津軽では土用になっても冷風やまず収穫は四分作にとどまった。

天明二年の冬から三年の春にかけて異常な暖かさであったが、冬暖いのは農業にとってよい傾向では無い。果して天明三年の五月ごろから冷氣に転じ、ひよる長になった麦は実のらずに腐り、田植のシーズンになっても寒さはひどかった。七月に入り浅間山が大爆発した。江戸でも一寸もの灰が積り遠くはなれた仙台でも降灰があった。地元の被害は大変なものだった。いまも「鬼押出」にその猛威をしのばせるが上州吾妻郡側に流れだした溶岩は利根川筋で二万人を殺し、江戸の大川に人馬の死体が無数に流れてきたという。

溶岩の流出のなかった側の家屋田畑も厚い灰の下になり往來には昼食時でも提灯が必要だったという。大爆発の灰が大量に舞い上ると天候にも影響する。灰が太陽光線をさえぎるからである。そうでなくても冷害の年だった天明三年はこの浅間山の爆発で拍車が

かかった。土用でも綿入れが必要だったというから夏は存在しなかったも同様である。

凶作の被害は凄まじかった。仙台藩だけでも餓死者四十万人、収穫は一割も無かったという。前年すでに被害が出ていた津軽藩では藩当局が米四十万俵を江戸・大阪に回送するという失政が重なったため餓死者十三万人、他国への逃亡者二万人、空家絶家三万五千余、一村ごとごとく荒無地となったところが多かった。東北地方はどこを旅しても死骸ばかりで子を殺して食う母親まで出現した。

と伝へている。又それから五十三年後に起る天保の大飢饉と当時の騒動を次の通り伝えられている。

天保の大飢饉と郡内騒動（一八三六年）
いわゆる天保の大飢饉のことである。

天保の初年から続いた連年の飢饉のことであるがそれが頂点に達したのが天保七年だった。この年には諸国風雨はげしく洪水などがあいついで凶作の様相がはつきりしてきた。

天保改元の前の年、すなわち文政十二年（一八二九）は歴史的な大豊作だった。村々の小道に米粒が散乱するほどだったという。古老たちがあまりの豊作にまた大飢饉が来るまえぶれではないかとささやきあった。その心配どおり天保元年二年と不作が続いた。三年は少し良かったが四年はひどかった。

低温、多雨に加えて奥羽大洪水・関東大風雨で本格的な凶作となった。東北一帯は収穫皆無、信濃越後は三分の一、四国も三分の一、九州中国近畿が半作ないし三分の一という有様で東日本で餓死者や疫死者が

続出した。

また田畑を捨て妻や娘を女郎に売り乞食となって他郷を流浪するものがおびただしい数にのぼった。

天保五年は豊作だったのだが、前年の影響で米価は下らず庶民の生活難は続いた。六年も同じ状態でいよいよ天保七年を迎えるのである。被害がもつとも大きかったのは、このときもやはり東北地方で、たとえば津軽藩では四万五千余人の餓死者を出している。飢饉の深刻化と対応して百姓一揆も天保期には最高数となる。鬭争の形態も逃散←越訴←強訴←暴動、打ちこわしとだんだん集団暴力的に変っていった。

この年の八月に蜂起した幕領甲斐の郡内騒動も一揆の最終形態である。暴動・打ちこわしの性格も強くなっている。

このとき郡内人口六万七千余のうち二万人ちかくの餓死者が出るという惨状にもかかわらず、地主穀物商人が食糧を買い占め売惜しみをして事態をいっそう悪化させていった。

絶体絶命に追いつめられた郡内地方の百姓からまず、下和田村の武七と、犬目宿の兵助が立ち上った。武七は特高一石の貧農であり、兵助は階層不明だが計数に明るかったらしい。彼らは、はじめ張り札などの手段で一村単位に農民を結集しながら甲州街道を西に進むにつれて、二、三千の貧農、日雇が参加してきた。八月二十一日五万人にも達した一揆勢は国中平野に足を踏み入れたところで暴動となって爆発。富農、豪商を襲っては打ちこわし無政府状態となった。結局甲府勤番の手に負えず諏訪沼津両藩の出兵によって、

鉄砲の乱射によってやっと鎮圧された。

逮捕者千百余人のうち六人がはりつけの刑となった。この郡内騒動は全国の支配層に「下民おそるべし」という強烈な衝撃を与えた。徳川幕府は政治問題にも社会問題としてもとりあげなかった。強権をもって鎮圧したのである。

昭和八・九年の東北地方の大凶作は今も昭和史の中に大きくとりあげられている。

満州建国、農業開拓移民、青少年義勇軍又二二六事件等の背景その後の日中戦争、太平洋戦争等を指導した軍事政権、今なお続く中国残留孤児等々に影を引いているのである。

戦時中食糧管理法が制定され限られた食糧を公平に分配する手段とされた。

敗戦後の食糧不足時代も国連の食糧援助により飢餓地獄の危機から脱することができた。

昭和三十年代に入り食糧の不足時代は終りとなる。以後飢餓地獄は生じていない。

昭和四十五年を境とし米の生産過剰時代となり生産調整・減反政策となる。昭和六十二年に於ては全国の水田三分の一は稲をつくらない、米作りを休むという時代になった。

「豊穰極楽 南無阿弥陀」の念仏歌は前述のような凶作、飢餓、餓死などの時代に生れ、生きて来た人達の「願意」ではなからうかと思うのである。

六 むすび

念仏歌は多種多様のものである。農村集落でも所に

よりそれぞれ異なるようである。

乏しい資料により記述したので、まとまりのない所があるがお許しをいただきたい。

徳川時代より発生したと見られる新川町の念仏講であるが明治大正、昭和の御代とそれぞれ歴史に刻まれた諸々の事件史を読んでゆくと念仏を唱へ説教を聞いたであろう人達の姿が彷彿としてくる。今や念仏歌は一種の古典芸能といっても過言ではないと思う。以上をもって新川町に伝承される念仏講の紹介を終る。